

侶に恵まれ、農地六十町歩、乳牛百六十頭、乳量年間七百トン生産、大型酪農経営をするまでとなった。御主人は十七年前に他界されたが、満州弥栄村の御主人が目指していた理想郷を、北海道の根釧原野に見つかりの観と涙する竹花寿々子さんである。

(他引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

人間の生きる道をめざして

秋田県 原 ミネ

はじめに

昭和二十年七月十二日、満州国榆樹屯第八三四一部隊陸軍官舎軍人、軍属の家族全員に、敷島神社の境内へ緊急集合命令が出た。そこで部隊長の訓示があり、「戦局はすでに終わりに近く、しかも、我が軍の前途は見通しも暗い感じである。第八三四一部隊の家族全員これより二十キロ南下し、梅河江へ移動する」とい

うことだった。一回官舎に戻った。だれもが子供の二、三人もいる若い人たちがかりだった。行き交う人々皆一様に緊張した面持ちで「しつかりやりましょうね」「お互いに頑張りましょうね」など力強い言葉を交わし合っていたが、それは、それは張りつめた気持ちであつた。五年間も住み慣れた土地も去り難く、それにも増して三人もの子供連れでは、行く先不安で、ただ大衆と行動を共にするしかなく、もうすぐ酷寒零下三〇度の冬になるので、取りあえず子供たちの着替えをリュックサックに詰めて持ちました。

第八郎との別れ

榆樹屯の駅はもはや重苦しい雰囲気だだれの顔を見ても生きた心地もなく土気色であつた。満鉄社員の前八郎に最後の別れを告げ、第八三四一部隊飛行隊の格納庫へひとまず集合したので。八郎は別れぎわに心から滲み出る言葉で「姉さん、気をつけてな。生き延びられるだけ生きてくださいよ。良彦（長男）も元気でな!!母さんの言うことをよく守るのだよ」とこれが最後の別れとなつたのです。思えば素直で心の優しい

八郎だった。「姉さん、姉さん」となんでもよく手伝い、いつかも主人が大事に植えたスイカを良彦がもいでしまったときも、しかられるのがかわいそうと身代わりになってくれた八郎との生活の思い出は数知れず、今は亡き弟の冥福を祈るのみです。八郎は第八三四一部隊内から榆樹屯駅まで八フイートの引込線を建設するので、満鉄社員として残留していたのですが、実はその二日前に入隊通知がきていたのです。

格納庫に来襲と部隊の移動

さて、第八三四一部隊飛行隊の格納庫へひとまず収容されたものの、一晚中ヤブ蚊に刺され、子供たちは空腹とヤブ蚊に悩まされ眠られず、私もなす術もなく、ただ一心に子供たちを守るうち、兵隊及び軍属の人たちは家族の乗り込む貨車の整備に懸命だった。ソ連機の飛来するなかで危険の上もない暗闇の作業である。やがて必死の作業もどうやら完成し、夜中の二時ごろ家族の者は貨車に乗り込んだのですが、その間中もソ連機の来襲は絶え間なく、整備作業にも乗り込みにも難航を極めました。暗さと不安と空腹に泣きさわぐ子

供たちにわずかばかりの金米糖の入った乾パンが一袋ずつ渡された。

やがて発車とともに疲労で眠ってしまい、どのくらいの時間走つただろうか、突然貨車の二階がものすごい轟音と共にガガガーツと落ちてきた。ソ連機来襲の最中にしかも暗闇の手きぐり作業で、ましてや汽車の振動も加わり、ただただ茫然としていた。幸い私たちは反対側だったので難を免れたが、ある母親が、その下敷きになり二人の子供の上にかぶさって子供をかばったので、子供は助かったが母親は鎖骨骨折で重傷を負い、問もなく死亡という不幸に遭つたのでした。出発間もなく惨事に遭い、前途多難な予感をぬぐい去ることはできませんでした。

榆樹屯第八三四一部隊の家族の移動はこのようにして三班に編成され、第一次出発は部隊長家族と将校家族、下士官家族で昭和二十年七月十八日梅河江へ出発した。私は当然これに編入されるのだが、常々主人は軍属家族と行動するように言い渡されていたので第二班に加わり、第三班はみんなの出発した後片付けをす

る兵隊たちが若干いました。第一次の組はその日の昼ごろ出発したが、出発が一時間でも早ければそれだけ安全性があつたことは後でわかつたのですが、第二次出発の私たちは前記のような有様で、また、この組には出産後一週間目の人もいたが、皆行動を共にしたのです。

夜が明けるころようやく安達あんだつに着いた。第三班は家族全員出発した後、飛行場の各建物や格納庫の被爆遂行でした。楡樹屯やうじゆんを後に昂々きうきやう溪経由、ハルビンへと向かつたのですが、途中格納庫が黒煙を上げ燃える飛行場を見ながら通過するときはどの人も無言のまま涙を流し、私も無念さで胸がいっぱいでした。その後の第三次の兵隊たちはどうなつたであろうか、私たちは知る由もありません。

安達あんだつの思い出

翌日の昼ごろ貨車は安達駅に到着した。このとき、出発以来消息の分からなかつた吉田喜蔵さん（福島県出身）に会いました。奥様のトキさんと子供の君子、政志ちゃんの二人と家族ぐるみの交際だったので、帰

る目的地は同じ東北ということもあり行動を共にしていたのでした。この三人と私、みゆき、良彦、綾子、ミサホがグループで、ここで吉田喜蔵さんに会つたのは神の引き合わせかときえ思い勇気がわき、水筒にいっぱいの水を汲んでもらつたことを覚えています。今は亡き吉田さんの御冥福を心からお祈りするばかりです。

第一到着地ハルビン

安達は鶏卵が安いので、主人が飛行機で出張の都度、鉄かぶとにいっぱい買ってきたものでした。安達の話を書いていたので地名だけは知っていました。そしてその安達へ汽車は停車している。主人を思い子供たちを見ては不安は高まるばかり、主人は特攻隊の第一号、家族持ちで特攻隊に出たのは関東軍はじまって以来初めてという人であつた。主人は、昭和二十年七月十四日鞍山あきやん飛行場へ機を受け取りに行つたが、整備されておらず完成する間待つことになり、その日の夕方最後の国際列車に飛び乗ってきたのでした。夜中に窓をたたく音に目が覚めたら「俺だよ開けてくれ」と、思い

もかけないことで驚きました。もう会えぬと思っていたのが現実そこに立っているのです。最後の食卓を囲み、子供たちのこと、前途多難なこと、この先どうなるか見当もつかぬことなど語り合ったが、「常に軍人の妻たることを忘れぬように」といった言葉は引き揚げ後も心の支えとなりました。主人の特攻機はソ連領のウランウデの川の鉄橋まで三千キロの距離を片道燃料で、敵の通路を寸断すべく体当たり戦法だったので。今上の別れを覚悟し、寝もやらず語り明かした翌日、また飛行服に身を固め辞世を残し水盃で別れたのでした。

さて、安達についた貨物列車は機関車を離されたまま動く気配もない。水も食べ物もなく子供たちに不安を与えぬように気を配り、なんとか生き延びねばの心だけで疲労はますます激しく眠ることもできず、貨車はいつのまにか発車していたが、そうして一週間もかかり、ようやくハルビンに着き、また機関車が離され、そこで終戦を知らされた。全く信じられぬことが事実として確認されたときの驚きは、気も動転し不安と焦

燥で何を考える力もなくそのままハルビンで部隊解散となった。軍人も軍属も男は武装解除され、ソ連軍に連行され、そこに残ったものは老人、女、子供ばかり。これらの誘導者もなく、統率者もなく、私たちはひとまずハルビンの花園小学校に収容されたが、老人、女、子供ばかりが残されてみれば何もできず、上を下への大混乱となった。強い者勝ちで軍勢力もなく政治力、警察力、報道機関も食べ物も寝る所もなく、一寸先が暗闇の手さぐり生活が始まった。

それから二、三日過ぎたころ、よそから集結した婦女子も入ってきたが、私たち同様着のままで子供たちは一人も連れていなかった。この開拓団はソ連の戦車と満人の襲撃で命からがら逃げ、足手まといの子供たちは自然死した者もあれば、井戸に投げこまれたり、泣けば所在が敵に知れるというので泣く子の口に手拭いを押し込んだり、そのまま捨ててきたと涙ながらの話に、だれが最愛のわが子をこんな目に遭わせねばならなかったかなど、考えられぬことを事実として語るその人たち。よく気も狂わずに逃げてこられた

と。とても口や筆では言い表わされるものではない。

またソ連軍の手榴弾でやられ動けなくなり、倒れたそばまで火が付いて衣服や頭の毛まで燃えて地面にゴロゴロ転がり、辛うじて火を消し逃げてきた人など、その惨状は耳をふさぎたくなるような話ばかり、負けた国のこととて当然といえばそれまでだが、もはや終戦になったのだから女、子供にまでこんな目に遭わせることはないのにと、腹立たしくくやしい気持ちでいっぱいだった。

第二集 結地 平房

花園小学校で四、五日も過ぎたころ、ここも避難民でいっぱいになったので、ソ連のトラックへ私たちは子供たちと積み込まれた。こぼれるばかりに積み込まれた大型トラックはそのまま走り出したので必死でつかまっていた。どこへ連れて行かれるのか方角も分からず、デコボコ道は空腹にひびき、目が回るようで、やがて「平房」に着いた。思ったより混乱の程度が少なく前日まで日本人が住んでいた様子が感じられた。官舎の割り当ても決まり、私たち子供三人とみゆき、

吉田トキさんとその子供二人計八人は一室が当てがわれ、何日かぶりにどうにか畳に座ることができた。食べ物も一応飢えをしのぐ程度あった。平房に着くと同時にわずかばかりの荷物が運び込まれたのが、後で致命的な打撃になるうとは、このときは夢にも思わないことでした。

不思議な出来事

それから十日も過ぎたころ、それまで入浴場へ足も踏み入れなかつたのが、何かのはずみで入浴場のふたの上に原少尉の名で落ト傘の縛帯を見つけた。まさに主人がそこにいて励ましているかのように思え、不思議さに茫然としたが、全くどうして縛帯などここにあったのか主人が復員してから話しても分からず、結局ほかの操縦士が偶然置いたものとか考えられぬことで、まるで主人がそこにいるような錯覚になり、幾度声に出して話しかけたことであろう。良彦たちにも話したら声はずませ同じ言葉を繰り返しました。そのころは食糧も不足ではあったが子供たちはまだ元気であった。平房でも大勢の子供たちがいたが、一たび病

気になれば医療設備がないため、栄養失調になり次々に死亡し、集団生活にはつきものの悪性流行病もこのころからまん延し始め、それに流言がとび、飲料水に毒が投げ込まれたとか、日本人はみな殺しに遭うとか、男は全部ソ連へ連れて行かれ、女は奴隷にされるとか、終戦になったのに、どうして死に値する残酷行為が許されてよいものかと幾度も思ったことでした。

日本人女性を要求

困ったことにソ連軍は日本人女性を幾人か出すよう要求してきた。要求通りにせねば全員機関銃でみな殺しにするというのだ。これには死をもって抵抗以外ないとは一致していたが数時間の協議の後、赤線の女性五、六人が犠牲となり、彼女らはソ連本部へ向かったが、既に青酸加里を準備していたことはだれも気がつかず、数分後に無謀にも私たちは夕暮れ迫る時刻だったが、この人たちを救おうとだれからともなく結果してブリキかんやバケツをたたきながら、ソ連軍本部目がけて「ワアーツ」と押し寄せた。このとき、目の前にドサーツと人が投げ落とされると同時にパンパン、バリバ

リーツと空砲が撃たれた。びっくりしてとつきに地に伏せそのまま逃げたが、考えてみれば危険も省みず無謀なことをやったものと慄然としたものである。まもなくその人たちは帰されたが、想像したとおり全員毒を飲んでしまったのでした。みんなで手厚く看護したがいかにもなく全員帰らぬ旅路となってしまう、残念、無念さは忘れられません。皮肉にも後でこのソ連軍に助けられることになるのですが、このときは神のみぞ知る、一寸先は闇、の翌日を迎えることになったのです。

匪賊の襲撃、死の行軍

それから三日目の夕方、平房の官舎の周りの草むらになんとも異様な険悪な空気が感じられ、何か無気味で嫌なことの起こりそうな予感。草むらの中から三三五五と人相の悪い顔のび上がり、また隠れるように、また立ち上りして、のぞいては「ヒソ、ヒソ」とその視線は肌に刺されるように感じられ、草むらの中をそちこちに移動していたが、やがて夜中の十二時ごろ匪賊となつて襲つてきたのです。嚴重な戸締まりにもか

かわらず「ダダン、ダダン」「ガツチャン」「バリバリッ」と破壊されるすごい音と共に女の悲鳴、子供の泣きさけぶ声、声、阿鼻叫喚の地獄とはまさにこのことであろう。物音に驚き良彦たちも飛び起き「母さん怖いよう」と綾子もミサホもみゆきも私の体にしがみつき、一塊になり、室の真ん中にどっかり座りこみました。「死ぬときは一緒だよ」この苦しみから逃れるには死以外にないと、母から離れぬように子供たちを体にくっつけ、「母さんがいるかぎり怖くないからね」と不安を与えぬように心がけ、励ましながら今殺されるか、今撃たれるかと生きた心地がしませんでした。地獄のような状態も夜が明けるころ、子供の着替えも主人の形見の品も全部盗られ、恐怖に震えるばかりで女は全員バリカンで丸坊主にし男装、足袋はだして子供の手を引き脱出したが、夜明けまでの数時間は実に長かった。東の空が白むと匪賊らは略奪した物をリヤカー、荷車、人力車に積み、引き揚げる者もいたが、着てる物まで剥ぎ取ろうとします。必死の抵抗で裸にされては外も歩けず、それにもまして満州の極寒が日

前です。一物残さず取られ、もはやこの地にいるのも不可能になり、どうせ生きられぬものなら一步でも日本に近づいて死にたいと子供たちの手をとり外へ出た。そして更に驚いた。肌着だけの女性もいた。匪賊はまだ大勢いて略奪の連続で目に余る悲惨な有様。覚悟はしているが女、子供、老人ばかりの栄養失調で、今にも倒れそうな者ばかりで親は子呼び、子は親呼び阿鼻叫喚の生き地獄そのものの形相となり、死は刻一刻と迫る感じでした。

このとき、突如異変が起こった。小銃がパンパン撃ち出されると同時に機関銃もバリバリと激しく、またまた戦場と化し、その恐怖はとでも表現できません。数十分か、いや数時間か、混乱してよくわかりません。後で分かったことはソ連軍が匪賊の暴動を知り、これを追っ払ってくれたのです。やがて昼近くなり、破壊された家は居住の用にはたちません。食べ物もなくなり、脱出するべく考える力もなく、ただ生きてるだけで空腹と絶望とたたかいながら「平房」を脱出、再度ハルピンの花園小学校へと行軍した。

集団を頼りに必死です。集団から離れてしまえばまた、強姦、略奪に襲われます。今日は何月何日なのか月日もわからなかったが、草が枯れはじめて秋雨の時期だったから九月には入っていたのではないかと思う。平房を午後一時ごろ出発したが、曇り空から雨となり三時ごろには本降りとなった。みゆき（十七歳）にはミサホを背負ってもらい綾子は私が、五歳の良彦は歩かせての行軍です。雨はますます強く降り空腹もひどく、良彦を時々抱いては一步も動けず、集団からはだんだん遅れ、気がついたときは鉄道線路伝いに歩いていた。良彦は「ボクもう歩けない。死んでもよいからここにいろよ」と線路へ座りこんでしまった。目的地はハルビンでも花園小学校はどこにあるのか。そこへ行っても食べ物はあるのか。子供たちと共に死んだ方がどんなに楽かとさえ思った。私たちの後からも遅れた人たちが歩いてきます。だれの顔をみても分からぬほど夕闇となり、防空頭巾の綿に染みた雨を吸いながら歩き続け、背中の子はいつのまにか眠り、その寝顔に雨が降りかかり一層あわれで泣くにも涙が出ませ

ん。良彦もみゆきも疲れ果て道ばたの草の雨しづくをハンカチに染みさせ吸わせながらも蚊のなくような声で「母さん疲れたよう。眠いよう。腹がへったよう」の連発です。思えば五歳の子供が大人と共に歩いているのだから当たり前ですが、私は「兄ちゃん男の子でしよう、がんばれ、がんばれ」とみゆきと共に励まし合い、またいつか線路から外れて道路に出ていました。満人が追っ掛けてきて綾子をおぶっていたネンネコを引き剥そうとしたが、必死の抵抗にこれは取らずに行った。先頭からはますます遅れるし、辺りは暗くはなってくる、道もわからず、雨は降る、何度か休みながら歩いているうち、ちょうど荷馬車がきた。お金が二十円ほどあったので出して乗りました。少し走ったころ、良彦は私のひざにもたれて眠っていた。いつか雨もやみ、月が出て周りが少し明るくなりました。しかしこの馬車人夫もこれ以上金がないと知ると程なく私たちは馬車から降ろされ、また歩かねばなりません。夜中の三時ごろ土地不案内にもかわらずよく探し当てたものです。

花園小学校にやつとたどりついた。コンクリートの上に雨でぐしよぬれになったままの服装で眠った。夜が明けてみたらまた襲撃に遭い、着物も剥がされた人も数多くいた。主人の形見の水筒を持って水を探しに行つた。学校なのですぐ水道が見つかったが、長い行列で一時間ほど並びくんできたら、子供たちはみゆきとちゃんと待っていてたくさん飲んだが、やはり食べ物がほしかつた。生後七カ月のミサホは母乳も出ないし水もよく飲めなくて、日ごとに干からびてとが

つたお尻も便で汚れ、おしめも洗つては干し、下しては使つていたが、干している間も見張つてないと盗まれる有様です。花園小学校のコンクリートへ倒れこむように眠り、その眠りの中に主人の夢をみた。飛行機の翼がもげて胴体ばかりの機で顔面血だらけになり両眼を「カツ」と剥き、なんとも凄いい形相で物言いたげに私を見るのですが、言葉にならず呼んでも答えず、自分の呼ぶ声で目が覚めて、みゆきが「おばさんすぐくうなされていたよ、どうしたの」つて私をゆさぶつていた。夢の話をし「正夢だったらもうこの世に希望も

ない」などと話し合つた。まる二日間食べ物もなく次の朝となつた。

第二集結地新香坊

ソ連軍の大型トラックに乗せられ方角も行く先も不明のまま、不安とあせりの何とも形容しがたい気持ちで走り続け、それでも前の行軍より少しはましだった。やがて午後二時ごろ新香坊についた。開拓部落で見渡す限りの草原に建てられた、一見、馬占山ばせんざん宿舎の感じでやはり窓硝子は破れており、風は吹きぬける。

九月も末近くの北満は既に冬に備える時期になつていた。開拓村だったのでトウモロコシ、カボチャ、大根、人参などとり残しがあつたが、ここへきて二日目の朝にやつとコーリヤンの握りめしが一人二個ずつ渡され、これが一日分で、雨の行軍以来三日目でやつと歯ごたえのある食にありついたわけです。一個をていねいにかみしめながら、もう一個を大切にしようと思ふ彦は「母さん腹がすいてるのにどうして一個しか食べないの」「後でみゆき姉ちゃんと綾子と分けて食べなさいよ」「ボクいらぬよ母さんだつて食べないと死

んでしまうよ。そしたらボク困るから」まだ五歳なのに良彦は長男だけにしっかりしていて、親思い、妹思いで良彦にだけは大人に話すようにしていたが、後一カ月後に天国へ旅立つとは夢にも思わぬことだった。それからは毎日コーリヤンのおにぎり一日二個ずつ渡されたが塩気がほしくてたまらず「なにかしょっぱいものないかなあ」と、かなわぬ望みをかけながら幾日か過ぎた。

栄養失調はますますひどくなり、収容所で晩に遊んでいた子供が翌朝冷たくなっている状態が毎日続いた。ここへ収容されたときは、オシメが万国旗のように干されていたのが、半月もせぬうちほとんどなくなってしまう、子供の死亡に一層のあわれを感じ、明日はわが身にふりかかると覚悟していた。朝ともなれば「今日一日なんとか生きられるように」と神に願ひ、夕べともなれば「今日一日生きられ有り難いことです」と感謝しつつ、一日また一日と生命の火をたぐりながら生きていました。良彦は栄養失調からくる皮膚病になり、全身が痒くて眠られず、体も細くなり皮を張った

骸骨のようになっていました。綾子、ミサホ、みゆき、だれもが同様でした。

稲刈り

新香坊では十月に入り、晩秋というより冬の気候だった。開拓村だったので間もなく稲刈りが始まり、人々はこれに駆り出され、出ればコーリヤンのおにぎりをもう二個余分に渡すというのです。みゆきは「私出るからね、もう二個もらえるから」と何度もうのですが、農家出身の私は極力止めました。重労働なことは十分わかりきったことです。作業に出た人たちは更に疲労が重なり、三日と続かず倒れて、また、幾人かが死んでいき埋葬されました。諸行無常の風も冷たく広い満州の土と化し墓標もなく、土饅頭の列はひっそりといくつも増え続けました。

再びハルビンへ

新香坊の生活も一日二個のおにぎりだけで約一カ月が過ぎ、よく命をつなげたものだが、良彦は栄養失調のため悪性の麻疹はしかにかかり健康な体力の子供でも命取りといった時代だったので、一たまりもありません。

高熱で顔は赤く吐く息も激しく目もどんより視線も定まらず譫言うわごとをいうようになり、ジーツと母親をみつめた目は五十年経った今も忘れることはありません。新香坊もいよいよ食糧が欠乏し始めたので、だれともなくまた南下の話が出て主要都市ハルビンへ行くうわさがたち、食料不足のこより中心部の方が治安も救済も早いのでは？と思ひ、周囲の人たちも南下組に入ったので私も心細くなりその決心をした。いつの場合も結果論はできませんが、何も考える力もなく成り行きまかせの行動です。再度ハルビンの花園小学校へ、前にトラックで運ばれた道を逆もどりです。ハルビンは重要な交通地区で必ず通過せねばならぬからです。

子供たちの死と二寸のローソク

良彦の病状は手のほどこししようもなかったが精神はしっかりして、かすかながらも意志の疎通はでき、発疹は全身、内臓、咽喉、気管、あらゆる所を侵し、声も出ずカラカラに干からびてしまった感じで、私を見るたびに話しかけたいとき、目の動き方をみてうなづき合っていました。電灯がないので夜ともなれば真っ

暗で現世相のように、そしていつ息を引き取るか全身脱水症状で手を動かすのも大儀の様子の危篤状態になった。目の動きだけは確かで何か求めている感じで、苦しいのをどんなに我慢したことでしょう。暗闇の世に吸い込まれまいと満身の力をこめて病魔と闘ったことでしょう。死の瞬間も分からずにはと必死でした。だからか分からないが二寸ぐらいのローソクをもらい、これをともして良彦の顔を見ていた。

やがて貨車で新京へ。更に新京駅から歩いて西大房身へ。これも例外なく破壊されていたが、官舎のよう室の隅に枯草をむしり集めて厚く敷いてそつと寝かせた。私も疲労と栄養失調で下肢、殊に足の甲がむくみ、三八度の熱が続き全身がだるくなった。小さな生命の灯が消えるのも刻一刻と迫っているようで目をつぶっていた。

思えば八月十二日、榆樹屯を出てから秋も十月半ば過ぎ、満州の秋空は青く澄み、見渡す限り一面の枯野原、真つ赤な太陽が西に沈むころは一望千里の夕やけとなり、子供たちとうたった「夕やけこやけで日が暮

れて、山のお寺のかねがなる」が思い出され、泣いて夕日を見てるうち、いつかこの夕日のように土の中へ消えて行くのではないかと精神錯乱状態になったが、「子供たちがいる、弱くなつてはいけない。最後まで生き延びねばならぬ」と我に誓う。私は陸軍看護婦でありながら一包の薬も手もとになく、注射もできず、ましてや飲む水さえなく、それから三日後に良彦は永遠の旅立ちとなった。「シヤネストック」の呼吸が続き喉が引きつり目をすえたときは心臓が止まり排便しており、これが良彦の最期でした、埋葬すべく夢中で手で土を掘っていた。指先から血がにじむのもわからずに。

翌日ミサホに乳を含ませていた。ところがどうでしょう。兄の後を追うように「アッ」という間の最期でした。泣けないほど弱つていたのです。死後初めて見つけた下顎に水色の真珠のような米粒大の歯が二本生えていました。気がつかずにいたのです。ミサホの死を夢のように、うそのように思いながら良彦と同じ場所埋葬しました。その翌日みゆきと綾子と三人で墓

参りの帰りに、満人のおにぎり屋がきたので綾子に買ひ与えた。これが命取りになるとも知らずに。全く世は無情です。歩きながら半分ほど食べたとき、前を歩いた綾子はよほどうれしかつたのか、後ろをふりむき私をみてニッコリ笑いました。これが母と子の最期でした。疫病菌がついていたのです。食べ終わつて間もなく今まで元気だった綾子は急にぐったりとなり、「綾子、綾子」と数回呼んでもゆさぶつても反応がなく、目の焦点も定まらず一言も言わず、発病後半日で兄の後を追つたのでした。昭和二十年十月二十一日、二十二、二十三と三日続けて子供はあの世へ。私は狂気のようになり、いや半分は狂っていたかもしれせん。

思えば楡樹屯出発以来わずか二カ月の生命で死よりもつらい毎日を重ね、西大房身に骨を埋めることになつたのです。生ける人に物言うように「良彦よ、兄妹仲良くお手々つないで行くんだよ。蓮華の花の咲く水辺の御仏になつて阿弥陀如来のみもとへ安らかにおゆき、綾子もミサホも兄の言うことをよく守り困らせぬ

ようにね。」と語りかけては去り難く、遙か空をみて主人に話しかけ、何も知らずにどこにいるのか、私の声が聞こえたら夢でもよいから姿を見せてくださいと心で願ひ、みゆき共々耐えねばなりませんでした。大人でも一家全滅は何組もおりました。私も発疹チフスになったときは人生の終わりがとさえ思ったのが、さまだまな困難に遭いながらもよくここまで生きてきたものだと思います、子供たちが心のささえであつたからだと考えます。

昭和二十一年六月二十七日帰国のため、日本国籍など手続を済ませ、乗船を目の前にして義理の立場にあるみゆきの死亡は残念、無念でなりません。出発以来あらゆる苦楽を共にしたみゆきは、疲労から倒れ、「急性悪性汎発性結核性肋膜炎」という長い病名の悪病に襲われ、必死の看護をしたが効果なく、最後は脳症を起こし手のほどこしようななく、永久の別れとなつてしまつたのです。戦争の犠牲者はまた一人増え、自分の行く先を容赦なく狂わせてしまします。

まとめ

北満から引き揚げて人間の生きる道を目指して終戦と同時に生きるために子供連れの強行軍を体験し、北満の荒野に最期の子供三人、弟、主人の姪、主人の七人家族のうち、私だけ生き延びて日本の土を踏んだ感涙の事実ありのままの記録です。今日まで生活の基盤を築くと共に年代の風化も防ぐ意味で、子孫に伝えるためにも忘れられぬ生涯の教訓にしたいものです。

そして二十一世紀の若者に告ぐ!!
戦争は絶対にいけません。

【執筆者の横顔】

原ミネさんは大正四年三月、秋田県平鹿郡生まれで、郷里の尋常小学校の高等科を卒業、進取の気性に富み、自立の企画性旺盛のところがあつた。

昭和十年に神奈川県の看護婦検定試験に合格、十二年には神奈川県産婆の検定試験を合格。同十三年には日本陸軍病院の満州チチハルに勤務し、同十四年にはノモンハン事変に従軍看護婦として活躍、「賜金」を受領している。

昭和二十年七月十二日、満州国楡樹屯にいた日本軍第八三四一部隊の陸軍家族全員に部隊長の訓示があったが、戦局は既に暗澹たる見通しの感じと受けとられて悲壮なものであった。

八月十五日後の混乱は言語に絶する有様、ソ連軍の爆撃から、暴力、略奪、悪らつたる暴虐無類の事件が惹起し、戦戦兢兢の様相、それに現住民の略奪、暴行に遭う日本人は避難民となる。栄養失調、伝染病にかり、五歳の長男はついに亡くなる。その翌日に妹も、続いてその妹も逝く。

原家は北満の楡樹屯部隊官舎で家族七人が平和な生活を送っていたのに、昭和二十年八月十五日を境に、ソ連の不法な越境侵攻に遭い、避難が始まる連日連夜、雨の日も、闇夜にも長蛇の列で一步一步運ぶ幼子との苦難、ついに、ミサホ、綾子、良彦の三人の子供、それに第八郎さんと姪のみゆきさんと御主人の六人は他界されて、たった一人になって日本の土を踏んだ。ミネさんの心中は悲劇と感情が入り交り、いかばかりであったろう。有りのままの事実を記録として子孫に伝

え、金輪際、戦争は絶対にいけないと二十一世紀の若者に告げたいとの原ミネさんの警鐘である。

引き揚げ後は、若き日に資格をとった助産婦を、昭和二十七年開業し、平鹿町母子健康センターで新生児、妊産婦の保健衛生に関する囑託事務を執り、日本助産婦学術研究発表全国大会に五回にわたり発表するなど、長年の母子保健活動と公衆衛生の向上発展に寄与した功績により秋田県知事から表彰状を受章された功労者である。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

五十年の記憶

岩手県 藤井謙子

岩泉と言えば岩手県の奥地、その又奥の大川に生まれた私の家は貧しく、山の中腹に掘り起こした少しばかりの赤土畑の収穫で生計を立てていました。物心つ